

EUのノーベル平和賞受賞による啓示

陳 波

アジア近代化研究所研究員、中央大学助教

2012年10月12日、ノルウェーのノーベル賞委員会は、今年度のノーベル平和賞を、第二次世界大戦後、長期にわたり欧州大陸の平和を維持し、欧州の統合で歴史的役割を果たした欧州連合（EU）に授与すると発表した。この発表を受け、異議を唱える声も多少聞こえるが（例えば、EU加盟国であるチェコの大統領クラウスは、EUへのノーベル平和賞授賞に対して「悲劇的な過ち。官僚機構ではなく、確固たる業績を上げた個人が賞を受けるべきだ」と批判した）、多くの人々は歓声を送っている。一人のアジア人として、まさにこの平和賞は国際関係が緊迫している（東）アジアの国々にとって渡りに船となり、多くの啓発をもたらすと思わざるを得ない。

周知のように、古来欧州は戦火が絶えなかった。国と国との間に百年間もの混戦もあった。18世紀の七年戦争及び19世紀のナポレオン戦争は、厳格的意義上の世界大戦とは言えないとしても、20世紀前半の第一次世界大戦（1914 - 18年）と第二次世界大戦（1939 - 45年）は全世界に拡大し、正真正銘の世界大戦であったと言えよう。これらの戦争はすべて欧州によって引き起こされ、後に全世界に波及した。特に人々を震撼させるのは、第二次世界大戦と第一次世界大戦の間隔はたった20年に過ぎず、世界的規模の大戦はなんと欧州が連続的に引き起こしたものであるということだ。

第二次世界大戦以後、世界が二分され、資本主義・自由主義陣営と共産主義・社会主義陣営との対立構造が生まれた。両大陣営の盟主であるソ連とアメリカは、2つの超大国として国際社会に登場した。2つの陣営の対立は、経済、外交、文化、イデオロギーの各側面にとどまらず、軍事的な側面からも対立した。両大盟主の間では、核兵器開発をはじめ、宇宙開発競争等まで軍備拡張が続き、世界は“第三次世界大戦が爆発する脅威”にさらされた。2つの超大国の核武装は「最後の戦い、究極の戦い」のために必死に準備してきたが、幸い直接対決は避けられた。しかし、各陣営の支援の元で第三世界の諸国には戦火が上がり、いわゆる“代理戦争”が多発した。1989年ベルリンの壁が崩壊し、冷戦の終結が宣言された。さらに、1991年にはソ連が崩壊してしまった。冷戦全期間にわたって、恐ろしい均衡は両陣営の全面的な戦争の爆発を阻止した。言い換えれば、冷戦期間中の恐ろしい均衡から幸運にも第三次世界大戦の発生は避けられた。

冷戦が終焉した後、世界は平和になったであろうか。その答えは「否」である。冷戦後アメリカという一極超大国しか残されておらず、世界の「力」の均衡は崩れてしまったため、ある危険が潜んでいる可能性はある。現実には、湾岸戦争、ユーゴスラビア紛争、コ

ソボ戦争、チェチェン紛争、対テロ戦争としてのアメリカによるアフガニスタン侵攻やイラク戦争、南オセチア紛争(ロシア・グルジア戦争)等の紛争・戦争が相次いで発生した。ヨーロッパ地域の戦火は止ったわけではなく、中東問題も複雑化し、アメリカのアフガニスタン出兵や旧ソ連地域の紛争・戦争から見れば、世界は真の平和を実現したとは言い難い。このような混乱とも言える世界に臨み、我々は何をどのようにすべきであろうか。中国は世界の多極化によって一極の超大国を牽制すると主張している。この主張はロシアをはじめ、多くのヨーロッパの国々の賛同を得ている。

歴史上長期にわたって戦乱にさらされてきたEU各国は、第二次世界大戦以後、歴史から学び、“固く団結し、小異を残して大同につく、大局を念頭におく前向きな態度をとるべきだ”と自覚した。1950年5月にシューマン宣言を発し、経済や軍事における重要資源の共同管理を提唱し、ヨーロッパの安定と発展をはかる構想を打ち出した。1951年の準備期を経て、1952年7月に欧州石炭鉄鋼共同体の協定が結ばれ、フランス、西ドイツ(現ドイツ)、イタリア、ベネルクス(ベルギー、オランダ、ルクセンブルク)の3国の計6ヶ国で経済協力を目指す経済協力共同体(ECSC)を誕生させた。1957年には署名し(ローマ条約)、1958年より発効する欧州経済共同体(EEC)及び、欧州原子力共同体(EURATOM)を成立させた。

1967年に以上3機関を統合し、欧州共同体(EC)へと進んだ。ECが成立した後はいろいろな活動を展開し、絶えず具体的な統合を推し進めた。1989年ベルリンの壁が崩壊した翌年、ドイツは再統一された。1991年にソ連が崩壊して間もなく、1992年2月7日に欧州連合条約(マーストリヒト条約)が調印され、翌年11月1日に欧州連合(EU)が正式に発足した(本部はベルギーの首都ブリュッセルに設置された)。EUは通貨統合と政治統合を協議し続けてきた。EU条約は後に修正が加えられた。その条約の附帯議定書では単一通貨ユーロの創設と3つの柱構造(欧州共同体の柱、共通外交・安全保障政策の柱、司法・内務協力の柱)の導入が規定された。

欧州経済共同体設立条約から改称された欧州共同体設立条約と欧州連合条約は、1999年発効のアムステルダム条約や2003年発効のニース条約で修正や一体化がなされ、統合をさらに深めていった。以降、1995年にはオーストリア、フィンランド、スウェーデンが、2004年には旧社会主義圏の東ヨーロッパ諸国を含む10カ国が、2007年にはブルガリアとルーマニアがそれぞれEUに加盟した。

2007年12月にはリスボン条約が調印された。同年までEU加盟国は27カ国に上った。以降もその統合の深化はとどまらない。2009年7月23日に、北欧のアイスランドは正式な加盟申請を行い、加盟候補国として承認された。2013年には加盟の是非をめぐる国民投票が実施される。モンテネグロに関しては2010年12月に加盟候補国として承認され、2011年10月から本格的な加盟交渉が開始された。また、セルビアの加盟候補国資格も2012年3月1日にEU首脳会議によって承認された。

現在、EUは世界史上で最も有力な国際的組織だと言える。EU各国は貿易、農業、金融等の側面においては、1つの統一した連邦国家に近づいている。しかも、内政、国防、外交等の他の側面においては、独立国家によって構成された1つの同盟に類似している。EUは27個の会員国を有し、総人口は5億人を超えている。かつて絶えず戦ってきたヨーロッパは、“連合国家”EUを建設した。ノーベル賞委員会が「EUは欧州を戦争の大陸から平和の大陸に変革させる重要な役割を果たした」との授賞理由を挙げたが、これは納得できる説明である。

EU内部ではEU統合に対し懐疑的に見ている人々、いわゆる「欧州懐疑主義」者も存在している。例えば、チェコのクラウス大統領は懐疑派の代表者の一人である。上述した2009年12月に発効したEUの基本条約リスボン条約をめぐる、彼は最後まで批准署名を拒否し、物議を醸してきた。それにもかかわらず、最も生々しい重要な事実、EUとその前身が60年以上にわたり、欧州の平和と和解、民主主義や人権の進展に優れた貢献をしてきたことであろう。EU大統領ファンロンパイはノーベル平和賞を受賞し、「欧州の平和を維持するEUの努力が報われ、誇りに思っている」(訪問先のヘルシンキで)と語った言葉は、多くの共感を得ている。

目下、EUではユーロ危機が泥沼化し不安定な状況にあり、EUが創設されて以来最悪のユーロ債務危機を抱えていると言えよう。今回のユーロ危機にうまく対処できなければ、欧州の再び分裂の危機にさらされる可能性さえ存在している。ユーロ債務は各種の利害関係が集まって交錯している。この苦境から抜け出すため、各国は協議し、互いに最大の譲歩を用意し、Win-Winの方法を探し出さなければならない。ちょうどこの時期に、ノーベル賞委員会がEUに平和賞の授与を決定したのは、EUが引き続き平和、和解、共生の道を歩むべきことに対する深い暗示と激励を与えるものであるだけでなく、世界の平和共栄を目指すべきことに対する鞭撻の意味をも与えているものといえよう。

ノーベル平和賞委員会は声明で「ドイツとフランスは70年間で3度、戦火を交えたこともあるが、今日では(統合により)両国の戦争は思いも寄らない」と強調し、このことは「しっかりと目的を持った努力と互いへの信頼構築を通じ、歴史上敵対してきた国々が密接なパートナーとなり得ることを示した」と称賛した(時事通信社、2012年10月12日付けニュース)。

それではアジア各国は、EUの平和、和解、共生という理念からどのような知恵と教訓を学び取るべきであろうか。特に、GDPが世界第2位と第3位の中国と日本は、アジアの第1位と第2位の2つの大国でもある。今日ちょうど領土問題の争いの真っ最中である。両国の間には歴史的な恨みが深い。双方は表面的に緩和政策をとっているが、内面的には緊張が走っている。ちょっと油断したら、うっかり戦端をひらいてしまう恐れもある。

中国と日本はあのちっぽけな島のために、人体が粉々に吹き飛ばされ、屍が至る所に横

たわるまで死闘し、再戦の力がなくなるまで戦わなければ、お互いに納得しないのであろうか。それとも、EUの知恵や国家関係の解決策から教訓を学び取り、まず、周恩来と田中角栄と、両首相の「(中国と日本)不戦の誓い」を守り、平和的紛争を解決する決意に立脚し、Win-Winの方法を共に探り出せるであろうか。

このWin-Winの問題解決法は今ノーベル平和賞受賞されたEUが目指してきた国家間関係処理の原則を最大限に守るべきことだと言えよう。中国と日本は不幸な戦いの時期もあったが、もっと長い間で両国は平和共存し相互に学んできたのではなかったか(日本は遣隋使や遣唐使を派遣した後、小説『紅樓夢』より約780年も早く、『源氏物語』を誕生させた。『平家物語』は『三国演義』より百数十年も早い。近代では中国は日本から多くの工業技術を学んでいる。両国はお互いに謙虚に学び合い、イノベーションを興す精神に満ちている)。EU内の国々は歴史上は、お互いに無残な戦いが長く続いたが、今日に至って、EU各国は心の傷を払拭し、前向きな考え方に転換し続けている。この怨恨・対立を捨てて共に平和を固守し、未来を構築するという新しい潮流に乗ることは、中国と日本にとっても必要なことではないだろうか。

欧米は既に数百年間世界の潮流をリードしてきたが、アジアの2つの大国としての中国と日本は手を組んで共に進んでいこうとする光景がなかなか見えてこない。逆に両国はお互いに敬意を払わず、海よりも深い怨恨を持って互いに対立し続けるということ自体、アジアにはヨーロッパのような智慧は生まれてこないのであろうか。心の嘆きを禁じ得ない。中国と日本の両国が手を組んで、世界の潮流をリードしていくことは、この百年以内には望めないことなのであろうか。もしそうなら、両国ばかりかアジア諸国にとっても、悲劇と言わざるを得ない。